

大学教育センターに期待する



東京農工大学 学長 小畑秀文

大学の使命を大別すると教育、研究、それに社会貢献となる。これらは相互に密接に関係するものである。教育は知の伝承であり、次代を担う人材養成という重要な大学の役割である。研究の重要性もいうまでもない。知の創造という高度な研究は教育と並ぶ大学に課された重要な使命であり、それを教育に反映させることこそ大学に期待されるものである。研究による知の創造なしには高度な教育は期待できないからである。さらに付け加えれば、大学における研究では大学院学生の果たす役割が非常に大きく、教育としての研究という側面が強い。次代を担う研究者の養成の一プロセスでもある。三番目の使命とされる社会貢献は高度な教育と研究に付随するものといってよい。現在は社会から隔絶した大学の存在は有り得ない。大学と社会との繋がりは強まる一方である。それは社会が複雑化、多様化するなど、急速に変化しつつあり、それと共に大学のステークホルダーが著しく拡大してきたことによる。従来は学生だけが主要なステークホルダーであったものが、産業界、社会、公共機関、政府なども含まれるようになってきている。社会貢献が重要性を増してきた背景がここにあるが、その使命を果たすベースになるものはやはり教育と研究である。我々としては、社会からの大学に対する期待を正面から受け止め、それに適切に応えることこそ肝要である。

私の認識不足を正直に披露しよう。留学生教育がGATT（関税および貿易に関する一般協定）において一つの貿易財と規定されていることを私は一年ほど前まで認識していなかった。おはずかしい限りである。工業製品と同じように大学における教育の標準化の必要性が指摘され、具体化に向けた国際的議論が進みつつある。ユネスコにおいても同様な動きがある。高等教育のグローバル化が進んだ結果である。欧米やオーストラリアでは既に留学生獲得を教育の輸出という捉え方をしており、大学経営の視点からも重要視して留学生獲得に努力している事実がある。このような世界の趨勢を考えれば、本学においても、グローバル化への対応の重要性を理解した上での教育改革の議論が必要であろう。

本学は研究中心の大学を目指して大学院部局化を行った。それは優れた教育システムの確立を前提にしたことである。実のある研究中心の大学になるためには、優れた学生を引き付ける力を持つ大学にならなければならない。2004年4月の大学院部局化と同時に発足した大学教育センターは、時代の要請に応えるべく、本学における教育の全面的見直しを狙ったものである。その主要な役割は、学部教育から大学院教育に至る広範な教育内容についての長期的視野・全学的視野に立った計画的調査研究、その結果に基づく改革に向けての積極的な企画・提言、そして大学教育委員会および学府・学部と協力しての調整・実行である。極めて重要な役割を担っているセンターであるといってよい。単なる立案と支援に留まってはその任務を十分に果たしたことはないであろう。前号において小林監事も言及されたことであるが、今後はセンターに「一定の強制権限」を持たせることも考慮する必要があるかもしれない。今後、学内のコンセンサス作りに努力したいと考えている。人員削減を余儀なくされる厳しい状況下においても教育力を維持し、国際的にも高い競争力を持った教育体系を実現する必要がある。それに向けた改革案作りの中で大学教育センターが果たす役割に大いに期待したい。